

必要ガアル。シカシ、如何ナル必要ノモノデモ體裁ノ悪イモノハ、カクサネバナラヌコトヲトキタリ。

須田町ノ元ノ廣場ノ無クナリシコト、コレモ空地ニ物ヲ持出ス性癖カラ來タノデ、又上野公園デ博覽會ヲ開クハ、適當デナイ。人間一人ニ對シテイクラノ公園ノ坪數ニスベキカト云フコトヲ考ヘルト、二百萬ノ市民ニ對シテ、公園坪數ハ足りテキナイニカカワラズ、博覽會ヲソコデ開クノハヨクナイ。アレダケノ名所ヲ根ヲ掘ツタリ、煙ヲ出シテ、木ヲ枯ラシテキル衛生上カラモヨクナイ、コレ即チ都市修飾ノ三要件ニカナワナイ、不利益ナリト云フベキデアル。

カカル立派ナ公園ヲ博覽會ノ爲メニ用フルハモツタイナイ。新市街ヲ設ケル時ニ、役立ツ様ニ博覽會ヲ利用スルガヨイ。

日本ニハ博物館ガ少ナイ。モツト建テバナラナイ。私ハ其爲メニ、大イニ説イテキルガ、博物館ヲ建テルニハ、ソノ地方ノモノハ、其地方ニ置カネバナラナイ。ソレガ原則デアル。青森ノモノハ青森ニ、ギリシアノモノハギリシアニ、インドノモノハインドニ、日本ノモノハ日本ニ置カネバナラナイ。ソレガ原則デアル。其土地ノモノハ、其土地デ見ネバヨクワカラナイ。佐

る。マンモースと同居して居た野蠻人の中にすら繪があつた如く繪と人間とは極めて親しいものである。この題を撰んだ様なわけである。

畫家にも間違つた畫き方をしたものもあり又見る方の人にも誤まつた見方をするものが随分多い。餅屋に酒を買ひに行く様に畫家の賣らない様なものを買ひに行つて賣らないとて腹を立てゝる人が日本のみならず西洋にもたくさんある。この様に誤解のない様に餅屋は餅酒屋は酒と賣るべきを賣り買ふべきを買ふ様にする事は大切な事である。如何にしてこの説明をすべきかを考へて見るに今迄の人々が誤まつて居た事柄を一々あげて順々に説明したならばわかる事であらう。

(1) 眞にせまつて居るか否か。

よく一般の人々が繪を見て述べる批評は展覽會などへ行つて黙つて聞いてるとよくわかる事であるが其の繪がほんとうらしいかどうかと云ふ事を主として見て居る畫家の立場から見ても非常に拙劣な花の繪を見てしきりとほめて居るのはみな眞にせまつて居る事をほめるので恰も餅屋に酒の例と同じでありと云ふべきである。昔の人の見方もこれと同様であつた事はその批評が傳説として傳つて居るのによつてわかる。支那で或畫家

藤氏ハ三十年來、石器ヲ集メテキル。コレヲ博物館ヲ建テテ入レタナラ世界的ニ誇ルベキモノガアル。

秋田縣ノ佐竹家デハ、祖先傳來ノ寶物ヲ賣ルノハ非常ニ間違イシコトナリ。グタベストニハ十六ノ博物館有リ、十六ノ中一ツハ市デ新道ヲ改築セル時、ローマ時代ノ物ヲ掘リ出シタル時、市會議員ニハカリタルニ、滿場一致ヲ以テ博物館建設ニ可決シタト云フコトデアル。

私ハ熱心ニ説イタ結果、金澤岡山等ニ出來ツツアル。忠魂碑貴德碑等ノ保存ヲ忘レテバナラナイ、仁徳天皇ノ舊跡ノゴミステノ感アル如キ、我國民ノ惡癖ヲ改善スベキヨキ例デアル。キユーガーデンノ様ニ無言ノ説教所トシタイト思フデアリマス。

繪の見方

元來繪といふものは専門家許りが見るものでなくて一般世間の誰でもが見るものであるから取立ててこの見方の説明をするのはおかしい様であるが人は一生の或時代にはペンなり筆なりを持つて繪を書いた經驗を有つて居る。故に誰でも繪かきであると云ふ事が出來

が龍をかき眼を入れたら龍が飛んで行つたとか又馬をかいたら鬼が乗つて行つたと云ふ如き日本に於ては巨勢金岡が馬をかいたら夜な夜な萩を書いた戸の所へ行つて其萩をかんだ事、探幽が鼠をかいたら猫がねらつたとか或人の書いた幽霊を女中が見て氣絶した事死人を書いたら惡臭が出たとかいふ如き又西洋に於ても書いた馬に對して生きた馬が嘶いたりかかれた葡萄を鳥が啄んだといふ様な事は繪に對してほんものらしさを望んで居た事がわかる。古今を通じて人々は繪に眞にせまる事を求めて居るが果してほんとうらしい事が繪の目的かどうかは考ふべき事である。

本物を模倣する事に於ては成る可く本物に近いがよい本物の様に、度いならば眞似をするより本物を持つて來た方がよい。何となればかいた林檎より本物の林檎の方が本物に近い。のみならずかいた林檎は食べられぬが本物は食べられるから猶一層本物の方がよくなつて來る。繪は如何に模倣が巧みでも本物には到底及ばないから眞にせまる事を望むなら實物を持つて來るがよい。丁度ビールでソースをつくる様なものでどんなに努力してもソースと全く同一のものの出來ないのと同じ事である。出來ないものを作る必要はないのでそ

れを望むのが無理な事である。繪の可能力を考へてもすぐわかる様に第一立體を平面に表すのが無理である吾々は色々のものの形なり色なりを一々觸れてみないでも見たわけわかる。初めはすべて經驗して色々の感覺に訴えて判断するがなれて來ると網膜にうつつた調價によつてわかるので調價とは調子の濃淡光の強弱とも言ふべきものである。自然の調價は非常に複雑で科學的の調査によれば景色で云へば白と黒との調價の差は一——五〇〇、までなるのに繪の具には一——五〇、までしかない。その十分の一許りの調價で自然を同じにうつせるわけがない。繪に無理の出來るのは當然の事である。及ばないとて書かないでは居られぬから其邊はよい加減に誤魔化しておく形から云つても吾々はものの形を正しく見る事は出來ないで横廣く見たり高く見たり人々によつて異なる。寫真でさへもほんものの調價をのこらず表せないし形だつて吾々の思つた程正確ではないやはり無理がある。要するに繪でも寫真でも本物の陰位のものである。そんなかげに如何なる價値があるか。

肖像畫や自分の見ない景色の繪は眞に近き必要があるがそれは藝術たる事は出來ぬ。肖像畫は本物があるか

上手に話すより中味のあるものを下手に話した方がよい。技巧だけが發達したのでは職人の様なもので大工などは體裁よりむしろ實用的條件を具へべきものでもいろいろの技巧を工夫する。そしてその技に感心したりなにかするがこれも悪くはない。が繪も中味を有するならば初めて技巧に感心すべきであるがそののみを重きをおいてみるべきものでない。技巧に苦心して居る人の陥りやすい弊でかなり有力な主張を有つて居てなかなか譲らない。技巧は目的の爲の方便である事を忘れない様にしてほしいと思ふ。技巧はもなかの皮の様なものの中で中味がなくては其の價値がない。

以上の1及び2は繪の見方の形式に關するものである以下に於て中味に對して述べやう。

(3) 道德的價値要求

昔は東西共に繪に道德的價値を求めた。ギリシャのアリストートルの書にホリブノータスは人間をよく書いたホーンは人間を悪く書いたジオネアスはよくも悪くもかかなかつたと。故に他の書に若い人はホーンの畫をみてはならぬホリブノータス又は他の道德的によき繪をみなければならぬと。ソクラテス曰く『よい繪とは品のよい人物又は高尚の景色を畫けるものなり』

ら價値がある寫真も同様である。がしかし繪に於て本物に價値があつて繪に價値がないならば繪の自殺である。繪に對して眞に近きを求むるは誤りである事がわかる。眞に近きを望むならば東洋畫なんて何の價値もなくなる。西洋畫の方が眞に近いそれよりもなほ實物の方が眞に近い。

(2) 技巧の如何

此の考も或點まで無理のない事である。第一畫家自身がこの考にとらはれやすいのであるから普通人としてあやまりやすいのはしかたがないのだ。例へばきれいな寶石が簡單な筆でよく表して居るとか柿の葉を一筆にかいてあるなどといふは技巧を賞してゐるのであるが何の爲の技巧か？ 或目的の爲の技巧でなければならぬ。技巧は話で言へば話し方の上手下手の如きもので話し方は話の内容があつて初めて表るゝのであり話す種があつて初めて話があるのである。故に只技巧だけが獨立して存在するのは間違つて居る。思想を考へなしに話方の上手下手を論じたり技巧だけよし悪しなどいふは主客顛倒である。

御馳走はおいしければよいので臺所でどんな技巧をこらそうが味が悪かつたらなんにもならぬ。貧弱な話を

と中世頃まで即ちローマ没落して後暗黒時代を経て復興時代に至るまで畫といふものはキリスト教の爲に命をつないで居た。これは宗教上の御用をつとめて居たからである。キリスト教では偶像崇拜は無いので畫の如きものも價値なしとせられて居たが或僧が之を道德上に利用したのであつた。支那に於ても同様に畫に對して道德的價値を要求して居た。

重盛の忠孝の畫をみてはよい畫であるといふ而して後には畫家其物の道德的性質倫理的思想を論じてしまふ立ん坊をかいた畫家はつまらないものにされてしまふ様になつてこれは大なる誤である。畫も勿論風教に害があつてはならぬが道德的に美を表さなければならぬといふ事はない。故にこの見方も落第である。

(4) 自然の理想

これは技巧本位の見方と同様少し畫のわかつた人の陥りやすい弊である。自然を理想しなければならぬと云ふ事は獨のウインヘルなどの主義で十九世紀に佛を風靡した主張である。之は哲學上より來たもので自然は單に義なるものにあらず自然の理想の表れた所に初めて美が生れる。故に自然の後にあるこの理想をかかねばならぬと理想化せる自然を畫に求める。

元來理想化といふ言葉は勿體らしくつてよろしいが哲學上の理想は畫には當てはまらない。哲學上の理想は圓滿完全であるからこれによつて畫の見方を定める時は畫に圓滿完全なる事を永める事になる。理想化せる畫とは例へば婦人の顔をかくとすると甲とか乙とか特殊のものをかくのではなくて一般的に美許り集めたものを指す事になる。ギリシヤの彫刻はさうであつて最典型的標本的のものを理想としたのである。即ち一般概念の具體化である。つまり完全なる或物の姿なり形なりが美であると云ふ事になる。なるほど美ではあるが極低級のものである。

昔ギリシヤに於ては眞面目に藝術を考へて居ずに實世間を見る眼で見居た。吾々は朝から晩まで色々のものを見て居るが之は物の美を味ふためにでなく利害の爲に見て居るが吾々はこれを意識して居ない。つきつめて言へば生き度い生き度いといふ觀念より已の生活に利あるものに近づき害あるものに遠ざからんとして見て居るのである。極端の人は月を見てさへあれが煎餅ならよいと見るかもしれない。利害觀念をはなれてみると自然はみな美しいこの觀念より敵となつたものは醜くなる。おはぎと馬糞は色に於て形に於て殆ど同一

近頃一般にかゝる傾向が生じて來たので畫にかゝれる範圍が廣くなつて來た。ヤランダ人は皺くちやの縞さんをよく書くが實際美しい。藝術に對する態度で見れば理想化したもののみがきれいに見えるとは云へない理想化は畫を見る中味の一つではあるが畫に對して理想だけを望むは間違つて居る。

(5) 科學的の眞。

學者に最多い弊で例ば人間の體の畫について解剖學上より見て違つて居るとか獅子の後に叢がある理用がないとか竹取物語に月見草はない筈だとか朝顔のつるのまき方が左右反對だといふ風に科學的立場からして畫に對して科學的眞を求めて居る。

ラスキンの上の如き見解を有して居た、これはキリスト教の思想から來て居るので自然は神のつくりしものにてこれ以上に完全美なるものはない故自然を忠實にうつせば美となると云ふて居た。これは畫に對してほんものらしい事を求める事と似て居るが前者は形の上の事で後者は形や見た所は少しは違つても自然の有する性質をそのまゝかくといふ點に於て異つてゐる。物の眞を調べる事は科學者のする事で畫家のする事ではない。

だけれども一は美しく一はきたなく見える。

故に畫を見る時は利害觀念を没却せねばならぬ。總て人は利害で行爲するとそれは實に醜いものであるから之を救はうとして釋迦も説いて居るではないか。凡そあらゆる藝術はこの觀念の中では味へないものである。叱られた時の涙は美しいとは云へないが芝居をみて流すものは藝術を味つての涙だから美しいものである。藝術は實在をぬき去つて居る故觀賞する事が出来る。地震にあつた時でも雷や水害や受けた時でも利害を去つて考へると實に面白いものである。

凡そすべてのものを客觀的にながめる餘裕を有して居たなら世の中は美しく面白い。辛い旅でも後からは大變愉快に思はれるのは客觀的に見るからである。偉い人は辛い自己を客觀視する事が出来るから難儀を難儀ともせず喜び勇んで之と戰ふ事が出来るので釋迦の教も之に外ならぬ。藝術に對する態度はこれであり度い。ギリシヤ時代にはかくの如く客觀視する餘裕がなかつた爲に利害觀念を以てして氣持よい圓滿完全の肉體を畫く事を以て畫の理想としたのである。よい景色美しい肉體許りが眞に美なるものではない。利害からはなれ、ば世の中のありとあらゆるものはみんな美である

自然と畫とは一致する事もしない事もある。ラスキンが夕方景色をかい居たら一婦人が來て之は眞にせまつて居ないと批評したら答えて曰くこんなの見たくはないかと。又或畫家の所へ竹を畫いてくれといふて來た時に朱でかいてやつた。すると物足りなくて墨でかいてくれと又來た。畫家曰く黒い竹があるかと。畫家の感情さへ表れて居れば色がどうあらうと云ふに足らない事である。ミケラレゼロは大藝術家だが其作を科學的に見たなら遠近法明暗法に於ても違つた所が多いだらう。生活をみて人間の形を眞にうつしたものとしてみたならば價値は減するだらう。之は人間の標本をかけたのではなくて人間を道具にして自分の感情を現學して居るのであつてそこに畫の意味があるのである

(6) 文學的の意味。

畫に文學的の意味を求める人があるがこれは文學者に多い。畫の題材に重きを置く事は悪くはないが小説の挿畫の如くこれによつてその物語を讀まうといふは誤つた見方であるといふべきである。

文學的題材には時代が入つて居るが繪では時代を表せるものではない。日本では義太夫の節又は源氏物語太平記の一節が繪になつて表されて居るが見る人はなか

な加感心する。之は前後の知識があるから味はれるものである。西洋でもミレのアンジェラスといふのは夕方野に若い夫婦が立つて祈りをして居て地平線の所に鐘樓がある。これは鐘樓と見えぬが題が題だから鐘樓と見る事が出来るが音は畫面に表れて居ない。それで千年二千年後に題も又さうした習慣もなくなつた時はこの畫の價値はなくなる。こんな畫は豫備知識や註釋が入用であるがこれを主として畫を味はうとするは誤まつて居る。なんとすれば註釋なしではわけがわからはいからかゝる文學的意味を繪に求むるもよい方法ではない。

新聞の挿畫の様に時間的に書いたものも餘り價値はない、一見して意味のわかるものであるならばよいがよんで初めて繪がわかる様ではよくない。然らば繪の中心は何か？ 口で云ふ事は出来ない。口で表せる内容を有するものならばつまらないものである。見て初めてわかるものでなくてはならない。眞を求むる事も否。理想を求むる事も否。科學的眞を求むるも否。然らば畫家は如何なる性質能力を有するものか？ 音樂家は音により文學者は文學によつて表す如く畫家は色や形によつて自分の感情を語るもので

人間は同情するにも理屈から來れるとのりこめぬが感情からやつて來られるとすぐのり込む様に繪も感情で理屈ではその情を動かし得ないこの點を注意すべき事と思ふ。之が端緒で藝術は如何なるものか人生に對してどんな能力あるものかそれから趣味教育に進んでゆくべきであるが今日はこれで止めておく。(終り)

建築の話

東京高等工業學校教授兼督學官

河津七郎先生

借家に住するより自宅を構へる方遙に利益なりこの事は大江氏の著應用家事精義に述べられたれば之を參照せらるべし。

一 建築につき一般の注意

(イ) 夜逃げ大工

世間の建築に經驗乏しき者には往々夜逃げ大工の災に遭遇することあり。是れにつきて最近に起れる最も著しき例あり。それは余の友人が建築を或請負人に依頼せしが請負人は甚だしき廉價にて之を承諾せり。やが

技巧を見せるものではない。故に其感情を語るのに純粹に色でし自然の形をかりる事もある。或程度までは寫實も入用となる事がある故に之を注意せねばならぬ。自己の感情を表す爲に自然を借りたのである。昔は今より自然の形を借りる事が多くそれに餘分な寫實まで入れる事が往々あつたが現今は直接に自然の形を寫さずに形なり色なりを借りて感情を表す事が増して來て居る。油繪の如き寫實的のものでも形や色で感情を表はし又其筆つきは最有力なる方法である。畫の感情は題材及び繪にかゝれた自然から來るものと直接色形から來るものとあるがこれが調和して繪の感情が表はれるのである。畫家が語らうとするものを強く語つて居るものは最もよいので未來派はこれである。この派がどうかといふ事は知らぬが感情を語つて居る事は確かな事實だ。佛の十九世紀の或畫家の作のあはれな漁夫といふのは最理想的の畫だ淋しい景色をバックにして半裸體の男が網を入れて赤ん坊が脇にころがつて居る。色は極沈んだ悲觀的情緒をそゝる様に出來て居て色や形より來る感情が淋しく内容も又同情すべきもので兩者が調和して情を表して居る。

て工事に着手せしが一度工事の模様を實測せらるべき旨を請負人は申し送り。直ちに其の場所に至りて其の實況を見たる友人は建築費の餘りに廉價なるに驚きむしろ奇異の感を抱けり。時に請負人は次の如きことを云ひ出せり「用ふべき材木は定りたることなれば之を早く一時に購入する時は比較的廉價なれば之を購ふために前金を拜借致したし」とされば友人は建築費の大部分を渡せり。然るに屋根に瓦を上ぐる頃より大工は僅一人しか來らずして工事は徒らに永引けり。友人は一方ならずあせる中昨年十二月末になりて材料を購入すべき費用の殆全部を仕拂ひたるにもかゝはらず又も金を借りに來りたれば與へざりき。請負人は今迄仕拂はれたるのみにては費用は不足するのみならず超過し居れば最早金がなくては仕事はなし難しといひて明けたる一月中は仕事を中止せり。かくなる時は注文主は弱きものにて契約成立の時誓約證使用證等を有するにより表向きに訴ふる時は勝訴に歸するは當然の事なれども請負人は平氣にて訴へたくば訴へよと嘯けり若し訴ふるとすれば徒に時と金とを費すのみにて注文主の損害は一方ならざるなり。適々中に立つ者ありて二三百圓の損はなしたれども一段落はつけり。而し